



女性の地位向上

わた なべ し ま
渡 部 志 満

(94歳)

住所
横手市

仙北郡金沢町立金沢中学校在職中より、地域婦人会の事務に携わり、以来50年以上、地域婦人会活動を通じて女性の地位向上に尽力した。

この間、昭和47年から横手市金沢婦人会会長、昭和54年から横手市地域婦人団体連絡協議会会長を歴任、生活改善運動、女性の地位向上、高齢者福祉、青少年健全育成、地球環境保全、消費者問題など、それぞれの時代に合わせた課題の解決のため、婦人会を牽引してきた。

平成2年からは、秋田県地域婦人団体連絡協議会会長、全国地域婦人団体連絡協議会理事などを務め、全県及び全国の婦人団体のトップリーダーとして多方面に活躍した。

平成9年からは秋田県結核予防婦人会会長に就任、「家族の健康は主婦の手で」を合言葉に、結核根絶に向け集団結核検診の受診率向上などに尽力した。

横手市教育委員、同青少年問題協議会委員、秋田県社会教育委員、同医療審議会委員、同消費生活審議会委員等も務め、社会教育、生涯教育、地域公民館活動の充実・強化にも貢献した。



俳句の普及・発展

い とう せい さ
伊 藤 青 砂
(本名 伊藤 達雄)

(84歳)

住所
秋田市

昭和23年、秋田俳句懇話会の設立に参加。昭和42年に秋田県俳句懇話会（改称）幹事、昭和62年に常任幹事、平成13年に副会長兼事務局長、平成20年から2年にわたり会長を務めるなど同会の発展に貢献し、現在は顧問として運営に尽力している。同会への長年の功績が認められ、創立30周年、40周年、50周年及び55周年記念式典において永年役員功労者を受彰している。

平成元年に社団法人俳人協会秋田県支部の結成に参画し、幹事に就任。平成20年には同支部20周年記念大会で永年役員を受彰し、平成23年から顧問。

昭和40年、中村草田男主宰の「萬緑」に入会。平成7年、同人に推挙され、現在は北東北三県の支部長を務めている。

平成13年、秋田市俳句人連盟の設立に参画し、幹事に就任。

その他、男鹿俳句会、男鹿市児童生徒文化祭、四季俳句会、秋田中央シルバーエリア「俳句教室」の講師や、あきた県民芸術祭「あきたの文芸」俳句部門の選者など、長年にわたり県内俳句大会の講師や選者を務める。

個人的な俳句作品の全国あるいは県内大会における入賞歴等は多数。社団法人俳人協会主催の第39回・第42回全国俳句大会で数万の応募句の中から選ばれ、秀逸賞を受賞した。



音楽文化の普及・発展

おお の けい じ
大 野 桂 二

(81歳)

住所
湯沢市

秋田県初の市民管弦楽団である湯沢市民管弦楽団に創生期から所属し、50年以上にわたり指揮指導や運営に参画。定期演奏会等において幅広い選曲と優れた演奏により、地域音楽文化の向上に多大な貢献を果たす。

平成19年から秋田県管弦楽連盟会長として加盟各団体の協調融和を図り、県内管弦楽活動の活性化と演奏技術の向上に貢献した。

「大いなる秋田」の普及に当たっては、県内初の湯沢公演を吹奏楽連盟、音楽教育研究会役員として開催して以来、41年にわたり演奏指揮や運営指導を行ってきた。

地域全般の吹奏楽、合唱の分野から世代を超えた参加型公演の長年にわたる継続指導を通じ、地域音楽活動の活性化や専門家の輩出、育成等本県音楽文化全般の向上発展に多大な貢献を果たした。



民謡の普及・発展

さ　　とう　　しょう　　げつ
佐　　藤　　昌　　月
(本名　　さ　　とう　　よしまさ　　令昌)

(76歳)

住所
大仙市

昭和42年に財団法人日本民謡協会秋田県南支部の設立に尽力。

昭和63年、同協会教授、同年、同協会秋田県連合委員会副委員長、平成13年、同委員会相談役、平成16年、日本民謡協会評議員を歴任し、平成17年、同協会師範教授に認定され、卓越した指導力のもと、多くの民謡全国大会で優勝者を輩出するなど、秋田民謡の普及発展に寄与。

平成元年、神岡町嶽友大学民謡講師、平成6年、秋田県民謡協会教授、平成11年、ペアーレ大曲民謡講座講師に就任。

平成元年、「秋田おばこ節全国大会」の立ち上げに理事として参画し、平成17年からは実行委員長として尽力。

平成19年度から大仙市が伝統文化・民俗芸能の保存普及事業として市内8か所で行っている「出前民謡」では、ボランティア組織を立ち上げ、自ら企画運営を行うなど、秋田民謡の保存普及、若手の育成に貢献した。



工業の振興・発展

あぶ かわ さき お
蛇 川 東 雄

(73歳)

住所
大館市

東光鉄工株式会社専務取締役、代表取締役として、卓越した経営手腕、旺盛な企画力と開発力、抜きんてた統率力を発揮し、旺盛なチャレンジ精神で経営を刷新してきた経営者としての実績と功績は顕著である。

同社が、鉱山の坑道の枠を作る技法を応用し、開発、実用化した柱や梁を不要とするドーム状構造物「TOKOドーム」の普及は高く評価され、南極・昭和基地で採用されている。「明日の日本を支える元気なモノ作り中小企業300社」に選定（平成19年、経済産業省）されたほか、「第2回ものづくり日本大賞」を受賞（同、東北経済産業局）している。

昭和61年から大館商工会議所の議員、常議員、会頭を歴任（現在、顧問）し、地域経済界の牽引役として地域の振興発展に尽力してきたほか、秋田県北部テクノプラザ及び大館工業振興会の会長（平成8年4月～平成18年3月）、秋田県機械金属工業会副会長（平成9年4月～平成19年5月）を務めるなど、大館地域のみならず業界全体の発展にも尽力した。

自社開発の「車輪付きスノーダンプ」を被災3県などへ贈呈するなど、東日本大震災の被災地支援にも積極的に取り組んでいる。



彫刻の普及・発展

こ やなぎ つとむ
小 柳 力

(71歳)

住所
秋田市

学生時代に彫刻芸術に出会って以来、50年後の今日に至るまで、心血を注いで自身の制作を追求し続け、県内・国内で多くの賞を受賞し、折々に作品集を刊行してきている。

平成4年から平成22年まで18年間会長を務めるなど、今年50周年を迎えた秋田県彫刻連盟の原動力として活動し、この間、37年間にわたって、県内作家の彫刻制作の支援、発展を目的として「秋田県彫刻シンポジウム」を県内各地で企画、開催するなど、県内彫刻家の育成、県彫刻界の発展に尽力した。

平成19年には、その集大成として、海外作家11名を招待し、県立北欧の杜公園において「秋田国際木彫シンポジウム」を国内作家と共に主催し、県民との交流はもとより、秋田の文化の海外発信にも尽力、寄与したほか、海外のシンポジウムでの日本の木彫の精神の紹介や各国の彫刻家との交流を通じて、木材県秋田の存在をアピールしてきた。

また、秋田杉について、広く一般の関心と認識を高めるため、平成14年から10年間にわたり、チェーンソーアート大会を開催し、今日の各地域によるイベント開催への基礎を築いたほか、平成19年からは、新人作家の発掘、育成指導のため、県彫刻連盟展において公募展を併設し、徐々にその効果を上げている。



保健医療・地域医療の向上

みや した まさ ひろ
宮 下 正 弘

(70歳)

住所
秋田市

昭和57年4月、秋田赤十字病院に内科部長として赴任して以来、糖尿病診療と予防医学の向上に貢献。平成8年4月には第9代院長に就任し、以来16年間にわたり、患者中心の医療の取組と病院経営の安定、向上に卓越した手腕を発揮した。

平成10年に現在地に移転新築した第4代秋田赤十字病院では、特に療養環境に力を入れ、全国的にも類のない個室感覚の4床室を造り上げたほか、アート（美術）とハート（医の心）の結合した病院の実現を目指し、600点を超える美術品を院内へ配置するなど、全国のモデルとなる新しい病院像を作り上げた。

医療面では、県内唯一の救命救急センターとしてその充実に努め、ドクターヘリの導入や総合周産期母子医療センターの設置を実現したほか、東日本大震災ではいち早く救護所を立ち上げるなど、災害医療救護にも積極的に取り組んできた。国際救援活動や国際協力活動にも注力し、発展途上国への看護師派遣、ネパール人看護師の受け入れによる同国の医療の発展と交流にも尽力した。

また、糖尿病患者教育にも力を注ぎ、県内における糖尿病キャンプの開催や患者会の創設に多大なる貢献をしたほか、秋田県の児童生徒15万人の身長体重全県調査により多数の成長障害児を発見し、その成果は国際シンポジウムで発表された。



書道の普及・発展

なが ぬま まさ ひこ
長 沼 雅 彦

(66歳)

住所
秋田市

毎日書道会会員、読売書法会評議員を経て、個展又は現代中国の代表的書家との二人展において作品を発表。

秋田大学で書の研究と教育にあたりるとともに、昭和50年に、「^{なみ}瀾の会」を結成し、現在も後進を指導している。

昭和50年から現在まで、秋田書道展の審査員を、昭和64年から平成19年まで秋田県芸術選奨選考委員を務め、平成13年には、秋田県書道連盟理事長に就任するなど、本県書道文化の向上発展に寄与している。

平成20年には、秋田魁新報に39回にわたり「書の愉しみ」を連載し、同年、秋田わか杉国体の天皇陛下御製碑を揮毫した。

平成21年には、秋田県新春書初め大会（秋田県書道連盟、秋田魁新報社、県立武道館主催）を副会長として立ち上げた。

平成23年、秋田魁新報社より「書を愉しむ」を出版したほか、魚住和晃氏、讃岐浩史氏との3人展を開催。また、世界書芸全北ビエンナーレに招待出品した。